生きて

地方出版社　広島で支えられて44年

溪水社社長　木村逸司さん（1942年～）①

学術書を中心に本作りを続ける溪水社（広島市中区）。大都市偏重の出版業界にあって、地方からの発信を続けて44年になる。創業時から社を引っ張る木村逸司社長(76)は、かつての「文学少年」。地理的、経済的な逆風にあらがいながら、故郷広島の出版文化をけん引し、2017年には「中国文化賞」を受賞した。

◇

広島東洋カープが初優勝した1975年の創業です。社名は、渓谷の水が周囲の自然や人々を潤しながら、次第に川幅を広げ、大海に注ぐ様子を描いた横山大観の「生々流転」から考えました。

カープはこれまで計9度のリーグ優勝を収め、地元を潤してきました。わが社にはそんな華やかさはありませんが、こつこつ発行してきた書籍は約1450点に達しました。

文学、歴史、思想、教育、社会…。幅広い分野の書籍を世に送り出してきた溪水社にあって、市販本の4分の1を占めるのが国語教育に関する研究書。関係者の間では「国語教育の溪水社」とも呼ばれる

「今があるのは、無理なお願いに耳を傾けてくれた方々のおかげ」

原点は中学時代から芽生えた文学への関心といえます。高校、大学時代には、中国新聞の文芸コンテストでそれぞれ1位、2位になり、作家を夢見るようになりました。この夢は断たれましたが、「文芸で社会に役立ちたい」との思いは消えませんでした。

「広島は文化不毛地帯」との恩師の言葉や、出版社を起こした友人の志に刺激され、会社を立ち上げました。しかし、自己資金ゼロという無謀な起業でした。「まだやっとるんか」と冷やかされることもありました。実際、借金の連続でした。

10年ほど前から社業は安定してきたとはいえ、今も事務所は40平方㍍足らず。編集、校正のほか、著者や印刷・取次販売会社との交渉も社員と4人でしています。ただ、今があるのは、借金や出版依頼など無理なお願いに耳を傾けてくれた方々のおかげであるのは間違いありません。

皆さんに感謝の気持ちを伝えるとともに、「出版社設立」という同じ夢を持つ人には少しでも参考になればと、私の歩んだ人生を話すことにしました。

（この連載は編集委員・伊東雅之が担当します）

生きて

戦争の記憶　川尻で空襲 親戚亡くす

溪水社社長　木村逸司さん（1942年～）②

現在の呉市川尻町で1942年4月29日、武司、静代夫妻の長男として生まれた

当時の川尻は、賀茂郡に属す農業と漁業の町でした。両親とも実家は久筋という集落で農家をしており、私は父の実家で生まれました。

ちょうど昨年末に出版した「芭蕉句碑で巡る安芸・備後」という本にも紹介されているのですが、久筋には「薫風塚」と呼ばれる江戸時代の句碑があります。松尾芭蕉を追悼する碑です。この地に建てられたのは、目の前に瀬戸内海が広がる野呂山の裾野だったからかもしれません。しかし、幼い頃はそんなことなど知るすべもありません。周囲の広場は、私たちのよい遊び場でした。

3歳の時、終戦を迎える。かすかに戦争の悲惨な記憶もある

父は幼くして母を亡くしたことも あり、尋常小学校を卒業後、大阪の呉服屋に奉公に出されたそうです。その後、兵隊に取られ、旧満州（中国東北部）にもいたと聞きました。ただ、私が2、3歳の頃には既に川尻に戻っており、鉄工所を経営していました。

母は、父の家に比べると裕福な農家の長女で、戦時中も食べる物には不自由しませんでした。

生まれ育った川尻町の家

しかし、終戦間際の45年7月末、母の実家は突然、不幸に見舞われます。川尻で1軒だけ空襲に遭ったのです。呉を空襲した米軍機が、余った焼夷弾を落としたのかもしれませんが、この空襲で10人いた家族のうち7人が亡くなりました。

当時、私は防空壕にいました。両親や父方の祖父は空襲後すぐ、母の家の消火に向かいました。しばらくして、戸板に載せられた叔父が防空壕に運び込まれてきました。全身、大やけどを負っていました。ろうそくの明かりに似た灯明に照らされる中、大きな声でうめく叔父の姿が今も脳裏に焼き付いています。

翌朝、跡形もなく焼け落ちた母の実家に連れられていくと、こもをかぶせられた真っ黒な遺体が、道端に並べられていました。前年の秋、庭になる柿を取って食べさせてくれたもう一人の叔父の遺体も、その中にありました。

◇

次回は25日に掲載します。

生きて

文学への目覚め　藤村の詩に魅せられて

溪水社社長　木村逸司さん（1942年～）③

1949年、地元の川尻小（現呉市川尻町）に入学しました。木造の大きな校舎が4棟あり、児童は千人前後いたと思います。1クラスは50人ほどでした。

小学校に入って、母方の叔母が小学館の雑誌「小学一年生」を買ってくれるようになり、よく読んでいました。しかし、放課後はたいてい友達と裏山で、日が暮れるまでチャンバラごっこやターザンごっこです。海も近かったので、夏は友達と一日中、泳いでいました。勉強は好きではありませんでした。

学校も寛容で、秋祭りの日は授業が午前中で打ち切りになり、田植えの時季には1、2日、学校を休むのが当たり前でした。

ただ、4年生の頃だったか、白紙で出した書き取り試験の答案用紙が父に見つかり、ひどく叱られたことがあります。「たとえ結果が伴わなくても、最後まで努力しないと駄目だ」と。普段は寡黙な父だっただけに、鮮明な記憶として残っています。しっかり者の母がよく口にしていたのは「実るほど頭を垂れる稲穂かな」ということわざです。こうした言葉が、その後の人生に少なからず影響したのかもしれません。

小学校高学年からは、「猿飛佐助」「霧隠才蔵」などの本も読んでいた記憶があります。ただ、この頃、最も夢中になっていたのは柔道でした。川尻中に進むと柔道部に入り、うまくはありませんでしたが最後は主将を務めました。

在学当時の川尻中校舎

本格的な文学に出合ったのは中学2年の頃。国語教師に薦められた島崎藤村の「若菜集」だった

図書室の司書も務めていた女性教師で、図書室に立ち寄った際に、「いい本があるよ」と声を掛けてくれました。その時、手にした「若菜集」の叙情的な文章に引き込まれ、「夜明け前」など藤村の小説も読むようになりました。

しかし、当時は詩や短歌への興味の方が強かったです。「小諸なる古城のほとり」といった藤村の詩や、「東海の小島の磯の白砂にわれ泣きぬれて蟹とたはむる」といった石川啄木の短歌などを一生懸命、暗記しました。昨年、ようやく藤村の詩の舞台、長野県小諸を訪ねることができました。